

「聖諦を考察する第二十四章」

それに対する反論を斥ける>真実を考察する>章の著述を説く>反論>起壊等が不合理であるという反論>

[四聖諦の修行対象と修行行為が不合理であるという反論]

ここに、

「もし、これら全てが空であるならば、
起こることは無く、壊れることは無い。
聖なる四つの真実¹が、
君には無い背理となる。 1

もし、『正理によって不合理となる故に、内外の事物のこれら一切の様相は空性である。』と論証するならば、そう見れば、君にとって沢山の大きな過失となるのではないか。

如何様にといえば、もしこれら一切が空性であるならば、その時、空であるものは無であるが、無いものは有るのではない故に、石女の子の如く生じること無く滅すことは無いので、如何なる事物も起こることは無く、壊れることが無くなるだろう。それが無いので、聖なる四諦を空であると言う君にとっては、(四聖諦が) 無い背理となるだろう。

如何様にといえば、このように、ここで、以前の因によって生じさせられ縁起する近取の五蘊²は、苦しみの苦しみそのものと、変化する苦しみそのものと、行の苦しみそのものの不調和となった故に、まさしく害する我性を持つものなので、『苦』と言う。

その苦も、誤りを捨て去ったことによって、聖者方のみが『苦しみである。』と知る。しかし誤りに従う故と、見るままに事物の本性を設ける故に、聖者でない者にとってはそうではない。

そのように、それらの事物によって、それらの事物自体をそこに認める故に、癩病等の病が感染したことによって感覚器官に異常をきたした、甘味の本性である黒砂糖をも苦みそのものと感じる者達にとって、彼らの知覚に相応してまさしく苦味であることは真実であり、まさしく甘味として(感じられるの)ではないが如く、ここでも近取の五蘊は苦しみの本性ではあるけれども、そう見

¹ 聖なる四つの真実：四聖諦。苦諦(苦しみの真実)・集諦(苦しみの原因の真実)・滅諦(苦しみとその原因が滅した真実)・道諦(滅諦を得る為の修行道の真実)の四。

² 五蘊：生を受ける時に得る、五種類の心身の集積。色蘊(形ある身体の集積)・受蘊(一時的な心の働きである感受作用の集積)・想蘊(一時的な心の働きである識別作用の集積)・行蘊(他の四種以外の集積)・識蘊(認識主体的な心の集積)の五。

るとしても、これらは苦しみの我性であると見る者達自身にとって、それらは苦しみであると設けた。しかし、誤りに影響されて他の様相として認める者にとってではない。それ故に、聖者方のみにとってそれは苦しみの我性であると真である故に、苦しみの聖なる真実（苦諦）という。

もし、『聖者でない者達も、苦の感受を〈苦しみである。〉とまさしく肯定するのではないか？それ故に、如何様に苦しみが聖者方のみにとって真実であるのか？』といえは。

苦の感受自体のみが苦しみの真実ではなく、ならば何かといえは、近取の五蘊ともにおいて（苦しみな）のである。

それ故に、聖者方のみにとってそれは真実である故に、『聖なる真実（聖諦）である。』と設けられ、斯くも

『掌にある一本の産毛を、人々は気付かぬが、まさしくそれが目に入ったならば、不快感と害が生じさせられるように、掌に似た幼子は、行苦³である産毛を悟らない。目に似た聖者は、それによって非常な出離の心も起こる。』

と説かれた。それ故に、その苦しみの聖なる真実（聖諦）であるので、『苦しみの聖なる真実（聖諦）である。』と設けられる。

『何時これを苦しみの聖なる真実であると悟るのか』といえは。

或る時、諸々の有為において生起と壊は有るけれど、空である故に僅かにも生は無く、僅かにも滅が無い時に、苦は有るのではない。苦しみが無ければ、また、全てが起こる真実（集諦）が有ると何処でなろうか。このように、ある因より全ての苦しみが起こり、生を欲し業と煩惱の性相を持つその因を『集』というけれど、果となった苦しみの真実（苦諦）が有るのではない時、果と離れたものは因そのものとして不合理である故に、集諦も無い。

苦しみと離れ、再び生まれぬことを『滅』というならば、苦しみそのものが無い時、何が何によって滅すとなろうか。それ故に、苦が滅すことも無い。それ故に苦が無ければ、滅の真実（滅諦）も無い。苦が滅すことが無ければ、

³ 行苦：三苦の一。輪廻全体に遍満する苦しみ。他に苦苦（苦しみの苦しみ。苦しみであると誰もが分かる苦しみ）と、変苦（変化する苦しみ。始めは楽に感じられても後に苦しみに変化する）がある。

また苦が滅して行く道である八正道⁴も有ると何処でなろうか。それ故に、修行道の真実（道諦）も無い。

それ故に、そのように諸事物が空であると言う君にとっては、聖なる真実の四つ（四聖諦）ともが無い背理となるだろう。

『それより如何なる過失となろうか。』といえよ。

聖なる四諦が無いので、
 尽く知られることや捨て去られることや、
 修することや実現されることは、
 合理となるのではない。 2

聖なる真実の四つ（四聖諦）ともが無い背理であるので、無常等の諸様相によって苦しみの真実（苦諦）が尽く知られることと、全ての苦しみが起こる真実（集諦）が捨て去られることと、苦しみが滅して行く道（道諦）を修することと、苦しみが滅すことが実現される一顕現されることは不合理である。

起壊等が不合理であるという反論 > [向と果が不合理であるという反論]

もし、『苦等聖なる諸真実が無いことによって、尽く知ること等が無い時、如何なる過失が有るのか？』といえよ。

述べよう。

それらが有るのではないので、
 四果⁵も有るのではない。
 果が無ければ、果に住す者も無い。
 向かう者達も有るのではない。 3
 もし、八種のプトガラである士夫、
 それらが無ければ僧伽は無い。
 優れた諸諦が無い故に、
 聖なる法も有るのではない。 4

⁴ 八正道：八の正しい修行道。正見（正しい見解）、正思（正しい思惟）、正語（正しい言葉）、正業（正しい行い）、正命（正しい生活）、正精進（正しいつとめ）、正念（正しい隨念）、正定（正しい禪定）の八。

⁵ 四果：声聞聖者の四種の修行の果。

法と僧伽が有るのでなければ、
 仏陀が如何様に有るとなろうか。

そのように苦を尽く知ること等が無い時、それは無いので、預流⁶と、一來⁷と、不還⁸と、阿羅漢⁹の果との、四つとも合理ではない。如何様にといえば、ここで諸煩惱の断¹⁰を集めることによって果の名を得る。¹¹このように、三結¹²を捨て去ったことによる十六刹那目¹³の『道類智¹⁴ (道について後に知る)』等にある煩惱の断が、預流果である。

修所断¹⁵である欲界の享受に関する諸々の煩惱のうち、大中小の諸相においても、それぞれ大中小の分類によって分けたならば、九様相となる。そこで、欲界の享受に関する(煩惱)の第六様相が尽きることによって、解脱道に有るその断が、一來果である。欲界の享受に関するそれら煩惱の第九様相の煩惱が尽きることによって、解脱道に有る断であるものが、不還果である。

-
- 6 預流^{よる}：預流果^{よるか}。四果の一。声聞聖者の修行の第一の果。[第 20 章] 脚注 13 参照。
- 7 一來^{いちらい}：一來果^{いちらいか}。四果の一。声聞聖者の修行の第二の果。[第 20 章] 脚注 14 参照。
- 8 不還^{ふげん}：不還果^{ふげんか}。四果の一。声聞聖者の修行の第三の果。[第 20 章] 脚注 15 参照。
- 9 阿羅漢^{あらかん}：阿羅漢果^{あらかんか}。四果の一。声聞聖者の修行の第四の果。[第 20 章] 脚注 16 参照。
- 10 断^{とつ}：所断(捨て去るべきもの)を捨て去った断滅。
- 11 諸煩惱…得る。：毘婆沙部では実在を肯定し、断にも実質があるとする。瞑想によって実質のある煩惱を捨て去ったことでそれぞれの断を獲得し、断が一定量たまると一つの結果を成すという。
- 12 三結^{さんけつ}：見所断^{けんしよだん}の三結。預流果を得る為に捨てなければならぬ、輪廻に結び付ける主な煩惱。見結(見解の結縛・教義等の理由に依拠して生じた有身見〈五蘊の何れかに名付けられた私が実在するという見解〉)、戒取結^{かいしゆけつ}(誤った修行の取捨を「最高」とする見解の結縛)、疑結^{ぎけつ}(本当に解脱を得られるのかと疑う結縛)の三。
 見所断とは、見道で捨て去られるもの(断たれる所のもの)。
- 13 十六刹那目^{じゅうろくしやなめ}：毘婆沙部は、真実を初めて直覚する瞑想の座を十六刹那に分けて、それらを順次経過して最終刹那に至ると説く。そのうち始めの十五刹那は見道に含まれ、最終の十六刹那目は修道であるとする。
- 14 道類智^{どうるいち}：チベット語直訳では「道について後に知る lam la rjes su shes pa」。その一刹那前の道類忍^{どうるいにん}が、修行道の真実を直覚し対応する所断を捨て去った後で、その状態で真実を直覚したまま留まる瞑想状態の智慧。
 類忍・類智は四聖諦と関わる十六心の一部。十六心は八忍^{はちにん}・八智^{はつち}で、生じる順序は以下の通り。苦法忍・苦法智・苦類忍・苦類智・集法忍・集法智・集類忍・集類智・滅法忍・滅法智・滅類忍・滅類智・道法忍・道法智・道類忍・道類智。
 忍は無間道(真実を直覚し、それぞれ対応する所断の直接の対治となる瞑想状態の智慧)、智は解脱道(真実を直覚し、直前の無間道が対応する所断を捨て去った結果の瞑想状態の智慧)に当たる。
- 15 修所断^{しゅうしよだん}：修道で捨て去られるもの(断たれる所のもの)。

修所断である色界と無色界の享受に関する煩悩を、それぞれの地（界）を九様相の分類によって分けたものより、非想非非想處¹⁶の地に関わる第九様相の煩悩が尽く尽きたことによって、解脱道に有るものである断を『阿羅漢果』といい、これらは四果という。

これらが如何様に正しいかといえ、もし苦を尽く知ることが有り、集が捨て去られ、滅が実現され、道を修することが有るとなるのであれば、苦等の聖なる諸真実が無いことによって苦を尽く知る等が無い時、それら四果は有るのではない。

それら四果が無ければ、四種の果に留まる者である、それらに留まる聖なるプトガラ達も有るのではない。まさしくそれ故に、（果を得ることに向かう）四向の聖なるプトガラ達も有るのではない。

ここで、第十六刹那目である道類智以前の、智と忍の十五刹那であるものはこのようである。

三界¹⁷の苦を顕かに了解した時、苦を対象とする忍と智の四刹那となる。そこで三界の苦を顕かに了解する時の、忍と智の四刹那は何かといえ、このようである。欲界の享受に関わる苦の見所断¹⁸である有身見と辺執見と邪見と見取見と戒禁取見と、疑と貪欲と瞋恚と慢と無明¹⁹という粗密十煩悩の対治となり、無常と苦と空と無我の様相として生じた、欲界で実動する苦諦を対象とする無間道²⁰の性相を持つ、苦について法を知る忍（苦法忍）の刹那が、第一である。その対象と様相のみを具えた解脱道²¹の性相を持つ、苦について法を知る（苦法智）刹那は、第二である。その如く、色界と無色界の享受に関わる苦を対象とする、瞋恚以外の説いたばかりの粗密十八煩悩の対治となり、苦等の様相として生じた無間道の性相を持つ、苦について後に知る忍（苦類忍）の刹那とは、第三である。その対象と様相のみを具えた解脱道の性相を持つ、苦しみを後に知る（苦類智）刹那は第四である。

三界で実動する苦の真実を顕かに了解することと、それら忍と智の四刹那がそうである如く、欲界の享受に関わる集諦の見所断である邪見と見取見と疑と貪欲と瞋恚と慢と無明という、粗密七煩悩の対治となり、因と集と生と縁の様相として生じた、欲界に関わる集諦を対象とする無間道の性相を持つ、集につ

¹⁶ 非想非非想處：有頂。無色界の最上界で知覚が非常に微細である為、想（識別作用）が有るのでもなく、無いのでもない界。

¹⁷ 三界：欲界・色界・無色界の三つの界。

¹⁸ 見所断：上記脚注 12 参照。

¹⁹ 有身見・・・無明：

²⁰ 無間道：真実を直覚する瞑想状態の智慧で、所断を捨て去る直接の働きを為す。

²¹ 解脱道：真実を直覚し、直前の無間道が対応する所断を捨て去った結果の瞑想状態の智慧。

いて法を知る忍（集法忍）の刹那は、第一である。その対象と様相のみを具えた解脱道の性相を持つ、集について法を知る（集法智）刹那とは、第二である。その如く、色界と無色界の享受に関わる集諦を対象とする、瞋恚以外の説いたばかりの粗密十二煩惱の対治となり、集諦の様相に生じた無間道の性相を持つ、集について後に知る忍（集類忍）の刹那とは、第三である。その対象と様相のみを具えた解脱道の性相を持つ、集について後に知る（集類智）刹那とは、第四であり、それらは三界に関わる全ての苦しみが起こる真実（集諦）を頭かに了解する四刹那である。

三界の苦集の真実を頭かに了解するこれら四刹那が斯様であるが如く、集諦で説かれた粗密七煩惱（と同数の）、見所断である欲界に関わる苦滅（に対して起こる七煩惱）の対治となり、滅と静と妙と離の様相として生じた、欲界の享受に関わる苦滅を対象とする無間道の性相を持つ、滅について法を知る忍（滅法忍）の刹那は、第一である。その対象と様相のみを具えた解脱道の性相を持つ、苦滅について法を知る（苦法智）刹那とは、第二である。まさしくそれやその様相によって、色界と無色界の享受に関わる苦滅の真実（滅諦）を対象とする、瞋恚以外の粗密十二煩惱の対治となり、無間道の性相を持つ、色界と無色界の享受に関わる苦滅について後に知る忍（滅類忍）の刹那とは、第三である。その対象と様相のみを具えた解脱道の性相を持つ、色界と無色界の享受に関わる苦滅について後に知る（滅類智）刹那とは、第四である。それらは、三界の苦滅の真実（滅諦）を頭かに了解する四刹那である。

三界の享受に関わる苦滅の真実（滅諦）を頭かに了解するこれら四刹那が斯様であるが如く、滅で説かれたものに第八番目の戒禁取見を加えた粗密八煩惱（と同数の）、見所断である欲界に関わる苦が滅し行く道（に対して起こる八煩惱）の対治となり、道と如と行と出の様相として生じた、欲界の享受に関わる苦が滅し行く道を対象とする無間道の性相を持つ、道について法を知る忍（道法忍）の刹那は、第一である。その対象と様相のみを具えた解脱道の性相を持つ、道について法を知る（道法智）刹那とは、第二である。まさしくそれらの様相によって、色界と無色界の享受に関わる苦が滅し行く道を対象とする、瞋恚以外の粗密十四煩惱の対治となり、無間道の性相を持つ、道について後に知る忍（道類忍）の刹那とは、第三であり、それら十五刹那は「見道」となる。

それらに尽く留まる聖者は、預流果を実現するために『向（入った）』といわれるが、第十六刹那目の道について後に知る（道類智）に留まる彼らを『預流』という。

それら八十八の粗密の煩惱は、修習に依拠することなく諸諦を見ることのみによって捨て去る故に、『見所断』と述べられる。

彼らが諦（真実）の様相を斯様に見た如く、後に修習することによって捨て去ることになるそれらは、『修所断』—それらは粗密の十煩惱となり、欲界の享受に関わる欲望と瞋恚と慢と無知と、色界の享受に関わる瞋恚が捨て去られたまさしくそれら三つと、無色界の享受に関わるまさしくそれら三つで十となる。それらは斯くも説かれた方法で、界と界より九様相に分かれたのであり、それら欲界と、四禅定と、四無色界に（別れたの）である。

煩惱のそれぞれの様相が捨て去られる為に、無間と解脱の分類によって二つずつの智の刹那を、煩惱の刹那より反転して設置する。このように煩惱の様相大の大は、無間道と解脱道の小の小が捨て去ることから始まり、煩惱の様相小の小は、智の刹那大の大までによって捨て去る—粗い汚れ（を断滅すること）は小さな努めによって達成させられるが、微細（な汚れを断滅すること）は大きな努めによって達成されるものであり、洗濯屋が（衣類を）洗うに等しいものごとであると知りたまえ。

そこで見道のもとで、六様相の修所断である、欲界の享受に関わる煩惱の対治である、『解脱道』という智慧の一瞬前の知覚の刹那に留まる聖者は、『一来果に向かう者』といい、この世間に一回帰還して尽く苦を超越する（涅槃を得る）ので、『一来』といわれるが、その果の為に（道に）向かい入り加行に留まるものを、『一来果に向かう者（一来向）』という。第六刹那目は一来である。

第六刹那目のもとで、解脱道である智慧の刹那の一瞬前の智慧の刹那に留まる、第九番目の煩惱を捨て去る聖者は、『不還の果に向かう者（不還向）』といい、この世間に後來せず、まさしくそれにおいて尽く涅槃を得るので『不還』といわれるが、その果を目的として向かい入り加行に留まる者は、『不還の果に向かう者（不還向）』という。第九刹那目においては『不還』という。

第九刹那目のもとで、『解脱道』という智慧の前の智慧の刹那に、有頂の九煩惱の対治に留まる聖者は、『阿羅漢の果に向かう者（阿羅漢向）』といい、天と人と阿修羅を含む世間が供養するに値するので『阿羅漢』といわれるが、その果を目的として（道に）向かい入り加行に留まる者は、『阿羅漢の果に向かう者（阿羅漢向）』という。有頂の第九様相の煩惱を捨て去ったことより第九の解脱道に留まる者は、『阿羅漢』という。

四向（四種の向かう者）と四果（四種の果に留まる者）という、それら供養の対象に値する八種の偉大なる士夫である聖なるプトガラは、世尊によって『僧伽である。』と説かれ、斯くも

『そこで天王であり統治者である、帝釈天が申し上げた。

〈生きものや農民が栄えることになり、福德を求める信仰心を具えた者で、物質より生じた徳行を、常に行う者達が、如何なる福田に捧げるな

らば果が大きいであろうか?)

〈善良な者よ、良く説こう。知と御足を具えることによって、布施の対象となった偉大なる僧伽。四相の向と、果に留まる四種の方々である。〉』と説かれた。

起壞等が不合理であるという反論 > [三宝が不合理であるという反論]

それ故に、もし四聖諦と、それらが尽く知られること等が無ければ、その時真実を見ることは無いので、諸果が無い故に、(果へ) 向かう者と果に留まる諸々のプトガラは無いので、僧伽は有るのではない。そこで、証悟法²²によって法がまさしく実現したことで、一切の魔によっても(悟りは) 世尊より別たれないので僧伽であるが、それ(僧伽である世尊) が有ることにならない。

もし、聖なる諸諦が無い故に、それら八種のプトガラである者自体が無ければ、優れた聖者方の法となった聖なる法も有るのではない。そこで滅諦とは、果である法である。道諦は、果に入る法であり、これが先ず、証悟法である。それを明らかにする教えが経証²³の法であるけれど、聖者の諸諦が無ければ、これら一切は有るのではない。

『優れた諸諦が無い故に、聖なる法も有るのではない。法と僧伽が有るのでなければ、仏陀が如何様に有るとなろうか。』²⁴

もし、斯くも説かれた法が有るならば、法に合致する法の励行によって一切法(現象)を一切の様相において完全に御理解されておられる故に、『仏陀は存在する。』ということは正理となり、もし僧伽が有るならば、その時彼の近しい教示によって智慧の資量を積み、彼に供養と恭敬と帰依をする等によって福德の資量を積んだならば、次第に仏陀へと変化する。

あるいは、僧伽が無ければ預流の果へ向かう者等も無い。諸々の向等を得ておらずに仏陀そのものを得るのではなく、世尊も以前に、疑いなく何らかの果(を得る為の修行道)へ向かわれたのである。その果に向かい入ったので、世尊は僧伽に属するのである。僧伽が無ければ、確実に仏陀世尊は有るのではない。

あるいは、世尊も無学に属する僧伽にまさしく含まれるのであるが、そう見るので或る者は、『仏陀世尊等の比丘の僧伽』と述べた故に、『世尊は僧伽の属にまさしく含まれる。』と語り、彼らの説に沿えば、

²² 証悟法^{しょうごほう}：悟りである法。

²³ 経証^{きょうしょう}：言葉として残された教え。

²⁴ 『優れた…なろうか。』：『根本中論』第 24 章 4 偈後 2 行・5 偈前 2 行。

『法と僧伽が有るのでなければ、仏陀が如何様に有るとなろうか。』²⁵
 というそれは殊更明らかである。

中間（第二法輪）を唱える者達²⁶は、『大いなる律経』²⁷より地²⁸の構成を示された教えより、『第一地に留まる菩薩は見道が生じたと言うならば、僧伽に属すると主張する。』という。そう見るならば、僧伽が有るのでなければ、菩薩も無いので、

『仏陀が如何様に有るとなろうか。』²⁹
 というこれが全く明らかである。

それ故に、

そのように空性を語るならば、
 三宝に害を為し、 5

一 空性の意味をそのように語るならば、見付け難い故と、時折起こる故と、福德の小さい者達がそれに会合しない故と、貴重なものである故に、『三宝である仏陀と法と僧伽』というものをも害するのである。

反論> [業の因果等が不合理であるという反論]

他にも、

果が有ることと、
 非法と法性と、
 世間人の名称の
 全てに害を為すのである。 6

『空性を語れば』というそれに繋げる。

もしこれら一切が空であり、これら一切が無ければ、その時一切の中に含まれた故に、それら法と非法二つの因を持つ、望まれる果と望まれぬ果と共に無くなる。しかし『世間の名称に従え』『改めよ』『作れ』『居ろ』『去れ』『来い』という、そのようなこれら一切も、『一切』の類に含められる故と、一切法（現象）も空性である故に、まさしく正理ではない。それ故に、斯くも示されたこの説は善良ではない。」と言っている。

²⁵ 『法と…なろうか。』: 『根本中論』第 24 章 5 偈前 2 行。

²⁶ 中間…者達: 大乘仏教徒達。

²⁷ 『大いなる律経』: gzhi chen po 大乘仏教徒の為の律経か？

²⁸ 地: 菩薩地。大乘仏教修行者の修行の段階。

²⁹ 『仏陀が…なろうか。』: 『根本中論』第 24 章 5 偈 2 行目。

章の著述を説く>それへの返答>他派の言説は縁起の真如を了解していない反論であると示す>他派が挙げた過失は自派に当てはまらないさま>論難が当たらない理由> [三義を了解していない反論であると示す]

そこで説く。君は、
空性の必要性と、空性と、
空性の意味を了解していないので、
それ故に、そのように批判するのだ。 7

君は自らの妄分別のみより「無そのものが、空性の意味である。」とそのように誤った意味に捏造して、

「もし、これら全てが空であるならば、起こることは無く、壊れることは無い。」³⁰

等によって論難を語り、我々を事更に厭離したことは、非常に害することであり、「正しくない様々な様相の妄分別によって衰えたのである。」という主旨である。

君が尽く思い込んだものであるこれは、我々がこの論書において、空性の意味であると語っていない。しかし君が空性の意味を知らぬので、空性も知らず、空性の必要性であるものも知らぬのである。それ故に、事物自体の本質が如何様に留まるかという意味を知っていないので、君は我々が説いたことと無関係で正しくないこの多くの様相を語ったのである。

それから、空性の必要性は何かといえば、これは

「業と煩惱が尽きることによって解脱する。業と煩惱は妄分別から。それらは戯論から。戯論は、空性によって滅すととなる。」³¹

と、「我を考察する」³²において既に説いた。それ故に、戯論（二元的な意識と対象）が残らず寂滅される為に空性を近く示すのであり、それ故に空性の必要性の必要性とは、一切の戯論が寂滅することである。しかし君が空性の意味を無であると考へ、戯論（概念作用）の網のみを増幅させるならば、空性の必要性を了解していないのである。

それから、空性とは何かといえば、それも

「他より知るのではない。寂静で、諸々の戯論が派生させていない。分別なく、別義ではない。それが真如の性相である。」³³

と、本偈において既に述べた。それ故に、一切の戯論が退いた本性である空性

³⁰ 「もし…無い。」：『根本中論』第 24 章 1 偈。

³¹ 「業と…となる。」：『根本中論』第 18 章 5 偈。

³² 「我を考察する」：『根本中論』第 18 章。

³³ 「他より…である。」：『根本中論』第 18 章 9 偈。

を、無そのものであると何処でなろうか。それ故に、君は空性も知らぬのである。

如何なる意味を保持して空性という言葉が当てられるかも、

「縁起生であるものは、それは空性であると説く。それは依拠して名付けられたもので、まさしくそれが中の道である。」³⁴

という本偈において示すことになり、世尊によっても

「縁より生じたもの、それは生じていない。それに生じる本性は有るのではない。縁に頼るものは空であると説かれた。空性を知るものは不放逸である。」³⁵

という偈が説かれた故である。そのようであれば、縁起生という言葉の意味であるそのものが、空性という言葉の意味であるが、事物が無いという言葉の意味であるものは、空性という言葉の意味ではない。君は事物が無いという言葉の意味を、空性という言葉の意味であると捏造して、我々に論難を探すのである。それ故に、空性という言葉の意味も知らぬのである。知らぬながら論難を探すことは、確実に君自身を害するのである。

論難が当たらない理由>そのような反論が(対論者は)二諦を了解していないと示す> [了解されていない二諦の本質]

> [根本論書に示された言葉の意味を説く]

我々に斯くも語られた論難を探す者は誰かといえ、世尊の善説より示された二諦による分類を誤りなく知らず、ただ経証のみを唱えることに精を出す者である。

それ故に、阿闍梨(龍樹)が、他派の善説の意味についての誤った考察を斥ける為に、先ず、世尊の善説より示された二諦によって、誤りなく設けられたこととして、

諸仏が法を示されたことは、
二諦に正しく依拠している。
世間の世俗の諦(真実)と、
聖なる勝義の諦(真実)である。 8

と説かれた。

ここで、仏陀世尊方が法を示されたことは、二諦に依拠して始められた。二諦は何かといえ、世間の世俗諦と、勝義の諦である。

そこで、

³⁴ 「縁起生…である。」:『根本中論』第 24 章 18 偈。

³⁵ 「縁より…である。」:経部より。

「世間とは蘊であると良く公認されている。そこに世間は確実に依拠した。」

と現れるので、蘊に依拠して名付けられたプトガラを「世間」と述べた。全てより覆い隠すので、世俗（全て覆い隠す）一無知は、事物の真如を全てより遮蔽する故に、「世俗」という。

あるいは、互いに依拠したので世俗であり、「まさしく互いに依拠したことによって」という意味である。

あるいは世俗とは呼称であり、「世間の名称」という主旨である。それも叙述と叙述内要や、知（知覚）と所知（知覚されるもの）等の性相を持つものである。

「世間の世俗とは、『世間の世俗である。』とあって、『世間の世俗』というものよりそのように特化された、世間ではない世俗も有るのか？」といえよ。

これは事物が如何様に留まるかに従って述べられたのであるが、ここでその分析は当てはまらない。

一様相として、眼障や青く腫れたものもらいや、黄眼等で根（感覚器官）が衰えたことによって誤った視界に留まる者達は、世間ではない。彼らの世俗であるものは、世間の世俗の真実ではないので、

「世間の世俗の諦と、」

と、それより違いを為した。これも『入中論』より詳細に説いたのでそれより理解したまえ。

「世間の世俗諦」とは、世間世俗諦一叙述内要と叙述するものや、知と所知等の、これら一切の余すことなき世俗名称は、「世間の世俗の諦」という。

勝義については、これらが有るのではなく、それについては

「述べられる対象を斥けた。心の所行を斥けたことによってである。生じておらず滅していない、法性は涅槃に等しい」³⁶

というそれ故に、その勝義について言葉、あるいは知覚が介入することが何処に有ろうか。その勝義とは、他より知るのではなく寂静であり、聖者方が各々自ら知覚されることと、一切の戲論（二元的な意識と対象）より超越したものであるが、それは示されるものではなく、知るものでもなく、

「他より知るのではない。寂静で、諸々の戲論が発生させていない。分別なく、別義ではない。それが真如の性相である。」³⁷

³⁶ 「述べられる…等しい。」：『根本中論』第 18 章 7 偈。

³⁷ 「他より…である。」：『根本中論』第 18 章 9 偈。

と、既に前述した。意味（義）もそれであり、聖なる（勝る）もそれであるので、勝義である。まさしくそれは真実（諦）であるので、勝義の諦である。

了解されていない二諦の本質 > [解説を参照させた意味を確認する]

この二つの真実の分類は、詳細に『入中論』より知りたまえ。

そのような反論が（対論者は）二諦を了解していないと示す > [二諦を知らねば善説の真如を知らぬ]

仏陀世尊方が法を示されたことは、この二つの真実に依拠して従事されたのである。教示の仕方がそのように尽く留まるので、

二諦の、
分類を良く知らぬ者。
彼らは仏法の、
深甚なる真如を全く知らない。 9

という。

そのような反論が（対論者は）二諦を了解していないと示す > [二諦が示された必要性]

ここで言う。「勝義は戯論と離れた本性であるならば、ならばまさしくそうであるとしてもしよう。蘊と、界と、處と、聖諦と、縁起等を示す、勝義ではないこの他のものによって何が必要か。真如でないことは尽く捨て去られるものであれば、尽く捨て去られるのであるものを示したことによって、何をするのか。」

述べよう。それはそのように真でもあろうが、しかしながら叙述内要と叙述するものや、知と所知等の性相を持つ、世間の勝義を承認しておらずに勝義が示されることは適わない。しかし、「示されていないとも了解することはできず、勝義を了解しておらずとも涅槃の都へと赴くことはできない。」と示す為に、

世俗名称に依拠しておらず、
聖なる義は示されることができない。
聖なる義を了解しておらず、
涅槃を得るとはならない。 10

と説かれ、それ故に、涅槃を得る方便である故に、水を欲する者が器を（使う）ように、最初に迷わず斯様に留まる世俗を承認したまえ。

そのような反論が（対論者は）二諦を了解していないと示す＞ [二諦を誤って捉える過失]

それ故に、そのように世俗と勝義の真実の性相を持つものである二諦の分類をしておらずに空性を語る、そのような様相の人々は、

空性について見解を間違えば、
 智慧の弱い者達は破滅する。
 斯くも、間違った蛇の掴み方や、
 明咒が間違っただけ成就されるが如くである。 11

世俗諦を単に知らぬ瑜伽行者で、生じさせられるものは本性が無いと了解して、その勝義の性相である空性を了解する者は、二極辺に陥るとはならない。「何かは今無いとなった時に、何が有るとなるか。」というように、以前に事物の本性を認識していないので、後にもまさしく無いとは了解しない。けれど影像に似た世間の世俗を害することも為していないので、業と業果や、法と非法をも害するのではない。勝義をまさしく事物であると捏造するのでもない。（何故ならば）本性と共に有るのではない諸事物のみにおいて、業の果等を見る故と、本性と共に有る事物は有るのではない故と、事物は本性と共に有ると語る者達のようにであろうと業と業果は見られておらず、依拠し関係して起こる（縁起生）等一切は見られていない故である。

そのように二諦の分類を見ておらず、諸行は空性であると見る者が、空性を見ることによって諸行はまさしく有るのではないと考える。あるいは幾らかの空性は事物であると考察して、その拠所の為に事物の本性をも考察する。それは、双方のようであろうとも空性について見解を誤るので、確実に破滅させるのである。

「如何様に」といえば。

先ず「もし、一切が空であり、一切は有るのではない。」と考えれば、その時これは邪に見るとなり、斯くも

「この法を邪に捉えたとなれば、不賢の者達は無駄にもなる。このように虚無見の、その不浄に沈み込むことになる。」³⁸

と説かれた。

もしまた、一切を抹消すると主張しないならば、その時、如何様に、これらの事物が対象として認識されようとも空性であるとなろうか。それ故に「本性が無い意味は、空性の意味ではない。」というこれは、確実に空性を捨て去るこ

³⁸ 「この法…になる。」:『宝行王正論』第 2 章 19 偈。

とになり、そのように捨て去って、法が貧窮する業によって確実に悪趣へ赴くことになる。

斯くも『宝行王正論』より

「他にも、これを誤って捉えたならば、賢者であるという慢を持つ愚か者は、捨て去ることによって不適な我性を持ち、阿鼻地獄へ頭から突っ込む。」³⁹

と説かれた。そのようであれば、先ず空性に事物が無いと捉えたことによって、そう捉える者を破滅させるのである。

もし、世尊方の空性と、その拠所である諸行がまさしく有ると考察する者のようであろうとも、涅槃へ赴く道へ誤って入った故に、空性を示したことはまさしく果が無くなるだろう。それ故に、そのようであれば、空性が事物の本質であると捉えられるとしても、捉える者を破滅させる。

「もし、有益なものが他の様相として捉えられるならば、勿論有益にはならないが、害するものであると如何様になろうか。諸々の穀物が順を違えて植えられると、植えた者を貶めるものではない。」といえど。

それ故に、阿闍梨が述べようと誓われた意味を示す例を説かれたのは、

「斯くも、間違った蛇の掴み方や、明呪が間違っただけで成就されるが如くである。」

といい、斯くも蛇の薬や真言の力によって秘訣そのままに保持したならば宝の大きな集積を引き寄せることになるが、斯様に奥伝されたことを失い保持するならば、保持者自身を破滅させるのである。

また、秘訣そのままに良く成就した明呪が成就者に利益するけれど、秘訣より衰えて成就したならば、成就者自身を貶めるのである。

その如くここでも、奥伝そのままに空性を保持したならば、保持する者を涅槃の最高の楽に到達させるが、斯様に奥伝を捨て去って保持したならば、確実に斯くも説かれた仕方によって、保持者自身を破滅させるのである。

そのような反論が（対論者は）二諦を了解していないと示す>

[二諦は了解し難いので、教示者が最初に説かれていないさま]

何故ならば、そのように空性を誤って捉えたことによって捉える者を破滅させるが、知慧の弱い者達も正しく捉えることはできない。

³⁹ 「他にも…突っ込む。」：『宝行王正論』第 2 章 20 偈。

それ故に、弱き者がこの法の、
底を悟り難いのご存知になり、
成道者の御心は、法を教示することより、
良く退いたのである。 12

何故ならば、誤って捉えたことによって、空性の定義であるこの法が知慧の弱い一肝の小さい有情を破滅させるまさしくそれ故に、無上の正しく完成した菩提へと頭かに完全に成仏して、非常に微妙な一切有情の界（状態）と性質をご覧になり、弱き者達がこの法の意味を了解し難いのご存知となって、成就者世尊の御心は法を示すことより退かれたのである。

斯くも、経典より、

「それから世尊は頭かに完全に成仏され、長く経たずにこう思われた。
『私は、精妙に通じ勇敢な者が知る対象である、考察する対象ではなく、
論理概念の考察対象ではない、深甚に映る、深甚な法を理解した。

それをもし私が他者へ示したならば、他者が私のその教えを了解する
とはならず、その者が私を害することになり、萎えることになる。心喜ばぬとなるので、我一人だけ遙かな僻地で、観ずる法について、楽に触れ続けることを得て留まろう。』

と、広範に説かれた如くである。

他派が挙げた過失は自派に当てはまらないさま > [論難が当たらないと示す本論]

それ故に、そのように誤りなく尽く留まる二諦を知らずに、

過失として背理になるものは、
空に当てはまらないので、
君が空性を捨て去らせる、
それは私に当たらない。 13

何故ならば、君が我々に

「もし、これら全てが空であるならば、起こることは無く、壊れることは無い。」⁴⁰

等によって大きな過失として背理を近しく挙げたことは、二諦の構成を頭かに知らぬので、空性と、空性の意味と、空性の必要性を如実に理解していないことによって挙げたことであるので、我々の空に一空性であると語る者に対してそれは妥当ではない。何故ならば不合理である故に、君は空性について悪質な

⁴⁰ 「もし、…無い。」:『根本中論』第 24 章 1 偈。

背理であると述べ、空性を捨て去らせる一捨て、掃い、斥けるものであるその排斥は、我々には当たらない。このように、君は事物が無い意味を空性の意味であると捏造して背理を述べたのであるが、我々は、空性の意味を事物が無い意味であるとは言わず、ならば何かといえ、縁起生の意味である。それ故に、空性であるという見解を批判するこれは、正しくない。

他派が挙げた過失は自派に当てはまらないさま > [過失が無いだけでなく、良質があるさま]

「我々の説に、斯くも言及された過失として背理が当たらないだけでなく、しかしながら諦等の一切の構成が殊更非常に合理である。」と示す為に説かれた。

空性が適うものは、
それにおいて一切が適うとなる。
空性が適わぬものは、
それにおいて一切が適わぬとなる。 14

一切事物は本性がまさしく欠如するというこれが適うものにおいて、斯くも語られたそれら一切が適うとなるだろう。

「如何様に」といえば。

何故ならば、我々は縁起生を「空性」と語り、それ故に、この空性が適うものにおいて縁起生が適うが、縁起生が適うものにおいて、聖なる四諦が適うとなるだろう。

「如何様に」といえば。

何故ならば、縁起生そのものが苦となるが、縁起として起こらないものはそうではない。それは、無本性が欠如するとなる。

苦が有るならば、全ての苦しみが起こる（集）と、苦が滅す（滅）と、苦が滅して行く道（道）が適うとなるだろう。それ故に、苦が尽く知られることと、集が捨て去られることと、滅が実現されることと、道が修されることも適う。苦等の諦を尽く知る等が有れば、諸果は適うとなるだろう。諸果が有れば、果に留まる者達も適う。果に留まる者達が有るならば、（果に）向かう者達も適うとなるだろう。果に留まる者と向かう者達が有るならば、僧伽が適う。聖なる諸諦が有れば、聖なる法も適うとなるだろう。聖法と僧伽が有れば、仏陀も適うとなるだろう。それ故に三宝も適うとなるだろう。世間と出世間の一切の法、

特に一切の悟りも適うが、法と非法や、その果や、世間の諸々の世俗名称も適うとなるだろう。

それ故に、そのようであれば、空性が適うものにおいて、一切が適うとなるだろう。

他派の言説は縁起の真如を了解していない反論であると示す>過失を挙げた者自身にその過失が当てはまるさま>

[過失の提示者にその過失が当たる理由]

空性が適わぬものにおいては、縁起生そのものが無いので、一切が適わなくなるだろう。如何様に適わぬかは、詳細に示すことになる。

過失を挙げた者自身にその過失が当てはまるさま> [それによって、自らの過失を他派の過失であると捉えた方法]

それ故に、そのように我々の説は殊更に完全に清浄であり、一切の構成に矛盾せず尽く留まるものである。そして、非常に悪質な過失を具える粗雑なそれらの自説に反するものを、非常に愚かさによって良質と過失が如何様に留まるかを見ていない

君は、自らの諸々の過失を、
私に尽く転嫁する。
馬に実際乗りながら、
馬そのものを忘れてしまったかの如く。 15

斯くも、誰かが馬に乗りながらまさしくそれを忘れて、それを強奪した罪によって他者に難癖を探すが如く、君も縁起生の性相を持つ空性の馬に乗っているだけであるのに、非常に気が逸れたことによってそれを認めていないので、我々に対して尽く論争するのである。

過失を挙げた者自身にその過失が当てはまるさま> [それらの過失が何であるか明らかに示す]

認識していないことによって、空性であると語ることにのみ、論難を探す者。他派のそれらの過失も何かといえ、それらを詳細に示す為に、

もし、諸事物が本性より
有ると随見するならば、
そう見るのであれば、諸事物は、
因縁が無いと君は見るのだ。 16

と説かれ、もし、君が諸事物は本性として有ると見解するならば、その時、本

性とは因と縁に相互関係しない故に、諸事物は因縁が無い—因と縁は有るのではなく、無因であると君は見るのである。因が無いという見解を承認するのではないとしても、

果と因そのものや、
行為者と行為するものと行為対象や、
生と滅や、
果へも害を為す。 17

のである。如何様にといえば、もし『壺は本性として有る。』と考えるならば、その時、本性として有るそれに粘土等の因や縁によって何が必要か—それ故にそれらは無いが、「壺」という無因の果も合理ではない。それが無ければ、行為者である壺師や、行為するものであるロクロ等や、壺を成す行為も無い。それらが無いので、諸々の生や滅も無いが、諸々の生や滅が有るのでなければ、果も有ると何処でなろうか。それ故に、事物は本性と共に有ると承認するならば、果等のそれら一切に害を為すのである。

それ故に、そのように事物は本性と共に有ると承認するならば、君にとって一切が適わぬのである。

それへの返答> [自派の承認は、空の意味は縁起の意味であると示す]

我々空性を語る者達にとっては、これら一切が合理である。何故かといえ、このように我々は、

依拠し関係して起こる（縁起生である）もの、
それは空性であると説かれる。
それは依拠して名付けられるもので、
まさしくそれが中の道である。 18

依拠し関係して起こる（縁起生）—因と縁に相互関係して、芽や識等が起こるものであるそれは、本性として生じていないけれど、本性として生じていないものは空性であり、斯くも世尊が

「縁より生じたものは生じたのではない。それに生の本性は有るのではない。縁に頼るものは空であると説かれた。空性を知るものは不放逸である。」

と説かれたことや、斯くも『聖楞伽経』より

「大知恵者よ。本性として生じていないことを考えて、私は、一切法（現

象) は生じることが無いと説いた。」

と詳細に説かれたことや、その如く『聖百五十頌経』よりも

「一切法 (現象) は空であり、本性が無いあり様によってである。」

と説かれたようにである。

空性であるものは、依拠して名付けられる—空性そのものとは、「依拠して名付けられる」と設けられる。

馬車の部分である車輪等に依拠して馬車であると名付けるが、その自らの部分に依拠して名付けられたものは、本性として生じていないのであるが、本性として生じていないものは空性であり、「本性として生じていない性相を持つ空性そのものが、中の道である」と設ける。このように本性として生じていないものにおいては、有そのものは無いが、本性として生じていないものにおいては壊が無いので、無そのものは無い故に、有と無の二極辺と離れる故に、本性として生じていない性相を持つ空性そのものは中の道—「中の行跡」という。それ故に、そのようであれば「空性」と、「依拠して名付けられる」と、「中の道」というこれらは、縁起生そのものの名前の一部である。

尽く分析したならば一切の様相において、

何故ならば、縁起生ではない
法 (現象) は何も有るのではない。
それ故に、空ではない
法 (現象) は何も有るのではない。 19

何かしら縁起生ではない法 (現象) とは有るのではなく、斯くも『四百論』より、

「何かが無処かで如何なる時にも、依拠しておらずに存在することは無い。然れば、いつ時も何かにおいて、恒常は何も有るのではない。」⁴¹

『虚空等は恒常である。』と、凡夫達が了解する。賢者達はそれらについて、世間人からとしても意味を見ていない。」⁴²

と説かれた。

世尊によっても、

「賢者は縁起の諸法を了解するとなり、辺執見に依拠して有るとはしない。因と共にあり縁と共にある法を知るが、無因無縁の法性は有るのではない。」

と説かれた。

⁴¹ 「何かが無処か…ではない。」: 『四百論』 第 9 章 2 偈。

⁴² 「『虚空』…いない。」: 『四百論』 第 9 章 5 偈。

そのように縁起生でない法（現象）は何も有るのではないが、縁起生も空である故に、空ではない法（現象）は何も有るのではない。何故ならば、これはそのようである故に、我々のようであれば一切法（現象）は空であり、他派が語った過失として背理になるのでもない。

それへの返答>そのように主張しない者にとって一切の構成が不合理であるさま> [所知である四諦が適わない]

事物は本性と共にあると語る君のようであれば、

もし、この全てが空でないならば、
起こることは無く、壊れることは無い。

のである。起こることと壊れることが無ければ、その時確実に

聖なる四つの真実ともが、
君には無い背理となる。 20

何故かといえば、何故ならば

縁起生でなければ、
苦があると何処でなろうか。
無常や苦を説かれたことは、
本性そのものに有るのではない。 21

本性と共にあるものは、依拠して起こった（縁起生）ではなく、縁起生でないものは無常ではなく、虚空の花は無常ではない。苦も無常であるとは、

「無常であるものは苦しみである。」

と世尊が説かれた。

その如く『四百論』よりも

「無常には必ず害がある。それに害の有るものは楽ではない。それ故に、
無常であるものは、それは一切が苦しみとなる。」⁴³

と説かれた。その無常も本性そのものにおいて一まさしく本性と共にあると承認するならば、諸事物に有るのではない。

そのようであれば、先ず諸事物がまさしく本性と共にあるのであれば、苦は

⁴³ 「無常には…となる。」：『四百論』第 2 章 25 偈。「無常には必ず害がある。それに害の有るものは楽ではない。それ故に、無常であるものは、一切が苦しみというものになる。」

適わないのである。

苦そのものが適わぬだけではなく、「本性と共にあると承認したならば、集（苦しみが全く起こる）も適わない。」と示す為に、

本性より有るのであれば、
何が全く起こるとなろうか。
それ故に空性を害するものには、
集（苦が全く起こる）は有るのではない。 22

と説かれ、ここで、これより全ての苦しみが起こるので、「苦しみの因より全く起こる。」という。それ故に、苦が空性であることに害を為し、苦は本性と共にあると承認する説のようであれば、それも生は無意味である故に、その因を考えることはまさしく無意味である。そのようであれば、空性に害を為す君にとって集も適わない。

「苦がまさしく本性として有ると承認する者に、苦が滅すことも適わない。」と示す為に、

本性として有る苦に、
滅は有るのではない。
本性そのものとは尽く留まる故に、
滅に害を為すのである。 23

と説かれ、もし苦が本性として有るならば、その時本性には無くなる事が無い故に、滅が何処に有ろうか。そのようであれば、本性が尽く留まる故に本性を尽く保持して後に無くならせることは、苦を滅すことにも害を為すのである。

ここで、事物は本性と共にあると語る者へ、聖者道も如何様に不合理であるのかを示す為に、

道に本性が有るならば、
修することは合理とはならない。
もし、その道が修されるものであれば、
君の本性は有るのではない。 24

もし、諸事物は本性が有るとなれば、その時道もまさしく本性と共にある故に、まさしく修習しておらずにそれは有るので、それにおいても再度修習したことによって何をするのか。そのようであれば、本性が有れば道を修習することは不合理である。『もし君がその道を修習すると承認するならば、そのようであれば、ならば君の聖者道はまさしく本性と共にあるとはならない。(何故ならば) 行為対象である故である。』とお考えになられた。

他にも、苦の断滅を得る為に、集が捨て去られる為に道を修習すると主張するものであるが、事物は本性と共にあると語る者のようであれば、前述の論法で、

ある時、苦と集と、
滅が有るのでなければ、
道の「苦の断滅」とは、
何が得られるだろうと主張するのか。 25

苦の滅である、道を修習したことによって得ることになる滅は、有るのではない。それ故に、そのようであれば、聖者の道も不合理である。

そのようであれば、事物は本性と共にあると語る者にとって、四聖諦ともが無くなるだろう。

そのように主張しない者にとって一切の構成が不合理であるさま> [四諦の智等と四果が適わない]

ここで他に、苦等を知ること等も如何様にあり得ないかを示す為に、

もし、まさしく本性として、
遍く知るのでなければ、
それは如何様に遍智となろうか。
本性は留まるのではないのか? 26

と説かれ、もし「苦は以前には遍く知られていない本性であったことより、それを後に遍く知るのである。」と考えるならば、それは正しくない。何故かといえば、このように

「本性は留まるのではないのか？」

一その本性であるものは、世間に真に留まり、火の熱のように他に変化しないのである。本性にまさしく他へ変化することが有るのではない時、以前に苦しみを遍く知る(遍智)ではない本性は、後にも遍く知ることには不合理である。

それ故に、苦を遍く知ることもあり得ない。

苦を遍く知ることが有るのではない時、

その如く、まさしく君の
捨て去られる、実現される、
修される、そして四果⁴⁴も、
遍智の如く適わない。 27

苦を遍く知ることにはあり得ぬが如く、全く起こるもの（集）を捨て去ることと、滅を実現すること—捨て去られることと実現されることの二つと、何であろうと道が修習されることのこれやそれらは適わない。本性として捨て去られていない集の本性は、後にも捨て去られることは不合理である。（何故ならば）無くなることは無い故である。その如く実現されると修習されることの二つにも当てはめたまえ。

事物は本性と共にあると語るならば、遍く知る（遍智）等が適わぬだけではない。しかしながら四果も遍智の如く適わない。斯くも、本性として遍く知られるのではない苦が遍く知られることは適わぬが如く、以前に本性として有るのではない預流果も後に有ることはあり得ない。預流果に見られるその如く、一來と、不還と、阿羅漢の諸果があり得ないことも理解したまえ。

そのように主張しない者にとって一切の構成が不合理であるさま> [三宝が適わない]

遍智の如く、それらの果が適わぬだけに尽きない。ならば何かといえ、⁴⁴「それらを得ることも適わない。」と示す為に、

本性を尽く保持することによって、
まさしく本性として、
得たのではないその果を、
如何様に得ることができるとなろうか。 28

と説かれ、本性を語ることを承認することで、以前に得たのではない本性となった諸物は後にも得ることは不合理である。（何故ならば）本性は無くなることが無い故である。それ故に、

果が無ければ果に留まる者は無い。

⁴⁴ 四果：修行よって得られる四種の果。預流果・一來果・不還果・阿羅漢果の四。（[第 20 章] 脚注 13～16 参照）

(果に) 向かう者達も有るのではない。
 もし、八種のプトガラの上、
 それらが無ければ僧伽は無い。 29
 聖なる諸諦が無い故に、
 聖なる法も有るのではない。
 法と僧伽が有るのでなければ、
 仏陀が如何様に有るとなろうか。 30

と説かれ、この二偈の意味は前述の如く知りたまえ。

他にも、本性を語ることを承認するならば、

君によって、仏陀は菩提に
 依拠していないという背理にもなる。
 君によって、菩提は仏陀に
 依拠していないという背理にもなる。 31

もし「仏陀」という何かの事物が本性として有るとなれば、菩提一切をご
 存知である智慧に依拠しておらず一相互関係していないともなり、

「諸々の本性とは、作られたものではなく、他に相互関係が無いもので
 ある。」⁴⁵

と現れる故である。その如く菩提にも仏陀が無くなり、仏陀に相互関係してい
 なくとも、拠所の無い菩提となる。(何故ならば) 本性として成立した故である。

他にも、

君の本性によっては、
 仏陀ではないものが、
 菩薩行を、菩提を得る為に
 追求したとしても菩提を得るとはならない。 32

ここで、仏陀そのものも、以前には仏陀ではない本性のプトガラが菩薩行を
 行じ菩提の為に探求したとしても、まさしく菩提を得るとはならない。(何故な
 らば) 仏陀ではない本性を斥けることは適わない故である。

⁴⁵ 「諸々の…である。」:『根本中論』第 15 章 2 偈後 2 行。

そのように主張しない者にとって一切の構成が不合理であるさま> [行為者と業果が適わない]

他にも、

何者も、法と非法を
いつ時も為すとはならず、
欠如しないものに何をするのか。
本性において行為は無い。 33

本性を語ることを承認するならば、法と非法を為すことは不合理である。空でないものに如何なる行為が有ろうか。(何故ならば) 有る故に、空ではない本性においては、行為は合理ではない。

他にも、

法と非法が無くとも、
果が君には有るとなる。
法と非法の因によって起こった、
果は君に有るのではない。 34

法と非法の因を持つものである、好ましいと好ましくない果が、もし本性として有るならば、諸々の法と非法が無くとも、それが君に有るとなるだろう。法と非法無くして君に果が有るならば、その時、法と非法より生じた果は君に有るのではない。法と非法等は無意味となるので、「法と非法の因によって起こる果は、君に有るのではない。」と説かれたのである。

「もし『法と非法によって起こる果は有るのではない。』と考えるならば、ならばその果は空でないのではない。」と示す為に、

法と非法の因によって起こった、
果がもし君に有るならば、
法と非法より起こった、
果が何故空ではないのか。 35

と説かれ、『これは空である。(何故ならば) 縁起生である故に、映像の如くである。』とお考えになられた。

そのように主張しない者にとって一切の構成が不合理であるさま> [世間の世俗名称が適わない]

他にも、「行け」「入れ換えろ」「煮ろ」「見ろ」「居ろ」という等のそれら縁起生である世間の世俗名称は、もし君が本性と共にあると主張するならば、「その時君が縁起生に害を為したのであるが、それに害を為したことによって、世間の世俗名称である限りの全てを害するのである。」と示す為に、

縁起生の
空性に害を為すことは、
世間人の世俗名称の
全てにも害を為すのである。 36

と説かれたことにおいて、「こと」という言葉は行為の一部特性であり、「害を為す」というこれと合わせる。

他にも、

空性に害を為すならば、
行為は何も無くなり、
開始の無い行為となる。
為さずとも為すとなる。 37

もし諸事物が空性ではなく、まさしく本性と共にあるとなれば、その時本性は有である故に、誰によっても、如何なる行為も無いとなる。虚空の非遮蔽性は誰が為すのでもないが如くである。「為しつつある」でないことも行為となるが、行為を為さずとも行為者となるけれど、それらはそのようでもなく、それ故に諸事物は空でないのではない。

他にも、

本性が有るならば、諸々の衆生は、
生まれておらず、滅しておらず、
永久に留まることになり、
様々な時点と離れたとなる。 38

もし諸事物が本性と共にあるとなれば、その時、本性は作られたものではない故と、無くなることが無い故に、これら一切の衆生は生が無く、滅が無くなるだろう。まさしく生が無く、滅が無い故に、衆生は永遠に留まるようになるだろう。因と縁に相互関係しないので、空ではないと語る者達にとって衆生は依拠

し関わって起こらず（縁起せず）、様々に異なった時点と離れるとなるだろう。

斯くも世尊が

「空でないものが僅かに有るならば、勝者は、何も預言なさらなかっただろう。変化すること無く、各々の事物に永久に留まるものにおいては、繁栄は無く、尽く衰退することは無い。」

と説かれたことや、その如く『聖象大力経』よりも

「もし、諸法（現象）は何かしらの本性が有るならば、声聞と共に勝者はそれをご存知となる。永遠の諸法（現象）は涅槃を得るとはならない。諸賢は如何なる時も戯論が無くならない。」

と説かれた如くである。

そのように主張しない者にとって一切の構成が不合理であるさま> [出世間の名称が適わない]

「事物は本性と共にあると承認するならば、世間人の諸々の世俗名称が不合理となるのみに尽きず、ならば何かといえ、諸々の出世間（の名称）もである。」と示す為、

もし、空が有るのでなければ、
得ていないものを得ることや、
苦しみを終わらせ、業と
煩悩の一切を捨て去ることも無い。 39

と説かれ、もし空が有るのではなく、これら一切が本性と共にあるとなれば、その時得ていないものは得ていないのみであるので、得ていない果を得るとはならない。その如く、以前に苦を滅尽していないので、現在も（滅尽すると）ならない。以前に一切の煩悩を捨て去ったとなっていないので、後にも捨て去るとはならない。

それへの返答> [縁起の真如を見れば、四聖諦の真如を見るとなる]

そのようであれば、何故ならば、事物は本性と共にあると語ることを承認したとなれば、一切が適わぬ故に、

縁起生を
見る者が、苦と、
集と、滅と、
道の、それらそのものを見るのである。 40

縁起生の性相を持つ空性を正しく見る者が、四聖諦ともを、まさしくそのみ（真如）として正しく如実に見るのである。

斯くも『聖一切法無入経』より、

「文殊よ。一切法（現象）は生が無いと見る者が、苦を遍く知るのである。一切法（現象）はまさしく無いと見る者が、集を捨て去ったのである。彼の一切法（現象）は非常に苦しみより超越したと見る者が、滅を實現したのである。文殊よ。一切法（現象）は事物が無いと見る者が、道を修したのである。」

と、詳細に説かれた如くである。

『聖禪定者吝法経』よりも、

「そして世尊が、若き文殊にこのように御言葉を賜れた。

『文殊よ。聖なる諸諦を正しく如実に見ていないので、〈誤った有情〉と思う心誤った者達は、この清浄ではない輪廻より超越するとはならない。』と、御言葉を賜れたので、世尊へ若き文殊がこう申し上げた。

『世尊よ。何を近しく認識することによって、有情達が輪廻より超越するとならないのかを示したまえ。』

世尊が御言葉を賜れた。

『文殊よ。我と、我所であると認識することによって、有情達は輪廻より超越しないのだ。それは何故かといえ、文殊よ。我と他であると顕かに見た者は、業を実際に行うとなる。

文殊よ。幼子である、聴聞を具えぬ凡夫は、一切法（現象）は全く苦しみより超越したと知らぬことによって、我と他であると認識する。認識して顕かに愛着するとなる。顕かに愛着することによって執着するとなる。嫌悪するとなる。愚昧となる。その者は執着し、嫌悪し、愚昧となったことによって、身体と言葉と心の三様相の業を顕現して行う。その者は有るのでないものに捏造をしたことによって、〈我は執着する。〉

〈我は嫌う。〉〈我は愚かだ。〉と思い妄分別をする。

その者は如来の教法に向かい出家し、このように思い、〈我は持戒を具える。〉〈我は梵行を行う。〉〈我は輪廻より正しく超越するだろう。〉〈我が涅槃を得るだろう。〉〈我は諸々の苦しみより解放されるだろう。〉と考え分別し、その者は〈これらの法（現象）は善である。〉〈これらの法（現象）は不善である。〉〈これらの法（現象）は捨て去られるものである。〉

〈これらの法（現象）は實現されるものである。〉〈苦を遍く知ろう。〉〈集を捨て去ろう。〉〈滅を實現しよう。〉〈道を修そう。〉と思ひ考える。

それからその者は一切の行より遠ざかることになる。〈一切行は無常で

ある。)〈一切行は、全く燃え盛っている。〉と、思い分別する。

そのように分別する者に、悲しみと一緒に、無様相を経過した作意が生じるとなる。その者は〈これらの法（現象）を遍く知ること、苦を遍く知ることである。〉と、こう思う。その者は〈我であるものが、集を捨て去ろう。〉と、こう思うことになり、これらの法（現象）によって傷つけられ、殊更恥じ、喜ばず、叱責し、恐れ慄き、全く狼狽することになる。

その者は〈これらの法（現象）によって傷つけられることは、これらの法（現象）が実現されたのであり、これは捨て去られる集である。〉と、こう思うことになる。

その者は〈滅を実現しよう。〉と、こう思い、それを二元に考察して滅を顕かに知るのである。

その者は〈滅を実現したとはこれである。〉と、こう思う。

その者は〈我であるものが道を修する。〉と、こう思い、一人だけで僻地に赴いてそれらの法を作意するならば、三昧を得るとなるだろう。悲心と一緒になったその作意によって、その者に三昧が生じるだろう。その者は一切法（現象）に対して心が背くとなり、外に反れ、外に退くことになる。それらが傷つけ、殊更恥じ、顕かに喜ばぬ心が生じるとなるだろう。

その者は〈我は一切の苦しみに解放されて、また後に如何なる行為も無く、我は阿羅漢となった。〉と、こう自分自身で知る。その者は死時を為す時、我自身が（再び輪廻に）生まれると見て、仏陀の菩提に疑いと迷いを持つことになる。その者は迷いに落ちて、死時を為して諸々の大地獄へ落ちるとなる。

それは何故かといえば、斯様に生が無い諸法（現象）を分別して、如来に対し迷いと二心（どちらとも決めかねぬ心）を生じさせる故である。』

それから、世尊へ若き文殊がこのように申し上げた。

『世尊よ。四聖諦を如何様に納得するのですか？』

世尊が御言葉を賜れた。

『文殊よ。一切の行は生じていないと見る者が、苦を遍く知ったのである。一切の法（現象）は起こることが無いと見る者が、集を捨て去ったのである。一切の法（現象）は永久に苦しみより超越したと見る者が、滅を実現したのである。一切の法（現象）は全く生じていないと見る者が、道を修したのである。』

文殊よ。そのように四聖諦を見る者は、〈これらの法（現象）は善である。〉〈これらの法（現象）は不善である。〉〈これらの法（現象）は捨て

去られるものである。)〈これらの法(現象)は実現されるものである。〉
 〈苦を遍く知ろう。〉〈集を捨て去ろう。〉〈滅を実現しよう。〉〈道を修そ
 う。〉と分別せず、妄分別をしない。このように、考察される対象である
 その法(現象)を、その者が見ていない故である。

幼子である凡夫達は、それらの法(現象)について考察するならば執
 着するとなる。嫌悪するとなる。愚昧となる。

その者は如何なる法(現象)も取らず、捨てず、そのように不捨不得
 の者は、三界に心が執着するとならない。三界の一切が生じておらず、
 幻のよう、夢のよう、こだまのように見る。一切法(現象)はそのよう
 な本性を持つと見るので、一切有情に対する執着や、怒りと離れること
 になる。それは何故かといえば、このように、彼がそれに対して執着し、
 怒るとなるその法(現象)を認識していない故である。

それによって心は虚空と等しいので、仏陀をも清浄に随見せず、法も
 清浄に随見せず、僧伽も清浄に随見せず、〈一切法(現象)は空である。〉
 と見るので、如何なる法(現象)に対しても迷いを生じさせることはし
 ない。迷いが無いことによって、(来世の蘊を)近く取ること無くなる。
 近取が無いことによって、近く取ること無く完全な涅槃を得る。』

と詳細に説かれた。

真実を考察する > [章の名を示す]

阿闍梨月称の御口より綴られた頭句より、「聖なる真実を考察する」という第
 二十四章の解説である。